

研究主題を設定するに当たって

財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構
研究研修委員長 東 重満

私たちは、社会から一層の幼児教育の質の向上が求められる状況の中で、平成 20 年度より「幼児教育の問い合わせを始める」ことを。平成 22 年度からは、さらにその「豊かさを社会に示す」ことをテーマとして掲げて研究・研修を推進してきました。その間、国では幼児教育の無償化が主要政策に示され、政権交代がなされた後は、子ども・子育て新システムの中心的政策として幼稚園と保育所の一体化を進める中で、学校法人（102条園含む）や社会福祉法人の他、企業やNPO法人などの事業者参入や指定制度を導入した公的運営費の一本化の検討が進められ、保育の質の維持向上という課題は一層浮き彫りにされています。

平成 24・25 年度の教育研究課題を策定するにあたって、（財）全日本私立幼稚園幼児教育研究機構研究研修委員会では、次の点が基本的な姿勢として重要であるとの共通認識をもって議論を進めました。

- ・保育実践は養護（生命の保持と情緒の安定）を基盤としながら、子ども一人一人の生涯にわたる生きる力の基礎となる学びの充実を実現する営みである。
- ・幼児の発達を助長（発達保障）することを目的とする保育実践への研究的な取組みは、幼児と保育者および研究者が地平（フィールド）を共にし、いま・ここの命ある保育の営み全般に視点をあてる臨床研究として進められることにより、保育実践の質向上に還元される。
- ・保育者が進める臨床研究は日々の実践と密接な関係にあるので、研究と研修は相互に関連する。そのため主題設定の理由や研究の手がかりと共に研修の企画の参考となる分科会等テーマ群の明示が必要である。
- ・保育者の能力を一層向上するためには、様々な機関が企画実施する園外での研修と共に、当事者であるその園の職員間で実現される園内研修の充実が不可欠である。

多様な議論を経て、平成 24・25 年度は「広く、深く、ていねいに保育の質を考える～保育臨床の視点を大切にする研修と研究を進めよう～」をテーマとして教育研究課題を編さんしました。

国の政策や具体的制度の変革の如何にかかわらず、子どもの発達のあり様と、それを支える家庭や地域の実態を鑑みると、日々保育に従事する私たちの臨床研究と園内研修を基盤とした研修の充実を園長のリーダーシップによって進められることが、これまで以上に避ける事の出来ない最重要課題といえます。

本研究課題について、保育実践者はもとより関係領域の研究者や保育者養成校の関係者、さらには保育に関係ないし関心をもたれているすべての人々に様々な場において、批判を含めて活発に議論していただくことを切に願います。さらには、本研究課題が様々な場で活かされることで、日本の保育の質が施設の類型を超えて充実向上することにより、すべての子どもたちのより望ましい発達と生活の充実に寄与する一助になることを期待します。

平成 23 年 7 月

子どもの人権・健康・安全 (研修俯瞰図 A 分野)

(分科会等テーマ群)

保育と食育

「いのち」を学ぶ保育

幼児期からの人権教育の在り方を考える

幼児の健康な心と体を育む

幼児の安全を守る保育と環境構成

子どもたちのやさしさや思いやりの育ち

幼稚園の危機管理と危険に対する予測について考える

各地区独自の課題

主題設定の理由

誰もが、子どもの健全なる成長を願うものである。その根本は、「いのち」の尊重であり、「その子らしく」育つことである。しかしながら、最近の子どもの状況は、育児不安や虐待など乳幼児子育て世代の問題、学校生活に適応できずにいる児童・生徒の問題、世代間にまたがる子どもへの無関心、そして、過度の競争原理を背景とした教育・保育の問題など、子どもたちの健やかな育ちにおいて、危機の時代と言っても過言ではないだろう。

1989年11月、第44回国連総会において、『子どもの権利条約』が採択された。「子どもが自由に意見表明をする権利」「精神的・身体的成长を保障される権利」「家庭環境のもとで成長発達する権利」「成長発達を阻害する有害な行為などの保護を受ける権利」これらの権利がすべての子どもに平等に保護されること、そしてすべての法制度が子どもの最善の利益の実現に向けられなければならないこと、とある（日本では1994年に批准）

また、わが国には1950年5月に児童憲章が制定されている。その総則で、「児童は人として尊ばれる」「児童は社会の一員として重んぜられる」「児童は良い環境の中に育てられる」と謳っている。共に一人一人の子どもの健全な成長の実現にとって、必須かつ普遍的原理といえる。

これらを包括すると『豊かな子ども期』といえると思うが、その豊かな子ども期を保障するために、考えられることは何だろうか。子どもたちを取り巻く環境は、家庭問題、社会問題などが複雑かつ深刻化の傾向にある。その中にあって、子ども達が楽しみのうちに『自然と』『人と』『物と』『社会事象と』関わり合いながら、内面を醸成し人として成長していく時間を持つことに用意することは重要と考える。これらを考慮しながら「いのち」を視点として、子どもの人権・健康・安全について考えたい。

【研究の手がかり】

幼児期はその人の一生の食生活、そしておいしさを感じる味覚の基礎を作り上げる時期と言える。子どもたちと深く関わる保育者として領域「健康」を中心として他領域にまたがり、食育についてでき得る保育を考えてみよう。

子どもたちが自然との交わり、動物との関わりを中心として、「いのちのひたむきな

「嘗み」を体で感じ自然をいとおしく思える体験をするためにはどのような援助や関わりをすればいいか。さらには、自分を大切にする気持ちを育むにはどうあつたら良いかをあわせて考える。

子どもたちにとって保育者は初めて出会う教師でもある。保育者の関わりが子どもたちの価値観や行動パターンに大きな影響を与えかねないとも言える。「いのちの扱い」や「～らしく」などの人権に関する保育者の言葉、態度がどのような影響を与えるかを考え、保育者としての姿勢を見つめてみよう。

園内の身近な環境（園庭・遊具・保育室など）について危険な個所を把握し、子どもの動線、興味やあそびを考慮しながら、どのようにしたら危険回避ができるか、環境構成を考えてみよう。

子どもたちが互いの関わりの中で違いに気づき、そして相手の存在を認め、かつ自分も大切にしつつ、育ち合うためにはどのような保育が想像されるか。また、保育者としての援助や関わりはどうあつたら良いか考えてみる。

安全マニュアル、防災計画などの危機管理体制を整え、訓練を含め、日頃から保育者として災害時や事件発生に備えて気を付けておかなければならないことはなにか、また心理的影響も含め、幼児への指導はどうあるべきかを考えてみよう。

保育者の役割と連携の在り方 (研修俯瞰図 B 分野)

(分科会等テーマ群)

- 自園の特色や方針を生かす保育や行事を見直す
- 保育者の連携を生かした保育と評価
- 園の課題にもとづく研修の在り方
- 教育要領の理解と保育実践
- 指導要録の作成と管理
- 望ましい社会人として学ぶべきマナーとは
- 保育者のメンタルヘルスについて
- 保育を開き保育を伝える力を高める
- 各地区独自の課題

主題設定の理由

幼保の一体化がこれまで以上に議論されている現在、「保育の質」が問われ、保育を実践する保育者の資質向上とその必要性が重要視されている。これまでも保育者の資質向上のため、各地区・各県によって様々に保育者の経験に応じた研修を通して保育技術の修得、幼稚園教育要領の理解を推進してきた。また、幼児をとりまく社会の変化から保育ニーズを学び、保育者としての自分自身を振り返る場と新たな気づきを生み出す場を設けてきた。一方で、制度における教員免許更新制によって研修の場と試験を通じ、保育者としての適性と資質、さらには専門性についての評価や判断を下される機会が設けられた。このことは教育界だけでなく社会全般から注目されている。

さて、私たちは幼児教育のプロフェッショナルである。幼稚園はそのプロフェッショナルたちで組織された幼児の生活と学びの場である。保育者は日々の保育の中で幼児理解に努め、一人一人の幼児の成長を願って環境を計画的に構成し、実践を繰り返し、努力を惜しむことはない。その努力は、幼児期に相応しい学びの場を提供しようという、情熱と使命感からおこるものであり保育者の役割であるからだ。また同時に、その努力が真に幼児に活かされているのか、独善的になってはいないか、もっと有効な保育を具体的に実践するにはどうしたらよいのか等々、保育を評価し課題を導き出すことも保育者の役割である。そうして導き出した課題は自園の保育課題と捉え、保育者の経験年数に関係なく各自が持ち寄り、保育者間の連携を元に実践を通して園内研修や話し合いの場で、お互いの共通理解を図りながら解決していくことが必要である。

また、これまでにってきた実践や成果を園内だけに留めておくのではなく、公開して地域や保護者からの評価を得て、さらに適切に改善していくことで保育者間の同僚性を高め、専門性を高めることも必要であり保育者のさらなる役割である。

他方、多様化する保育ニーズにあって、幼稚園の役割、そして保育者の役割も多様化している。「長時間、長期休業中の預かり保育」「子育て支援」さらには「小学校との連携」等々、それらの対応に苦慮している幼稚園、そして保育者は多いと思われる。教育という観点、幼児の育ちという観点から適切な対応が求められるわけであるが、

幼稚園の方針と保護者からの要望の間で一人悩む保育者が増えてきている。そこで、管理職にある者には、悩みや課題を速やかに相談できる職場の雰囲気作りはもとより、それらを共有し、一緒に改善に向けていけるファシリテーターとしての役割も求められている。

【研究の手がかり】

幼児一人一人の潜在的可能性は環境の作用によって引き出される。環境を構成していく保育者が留意する点についてあらためて考察してみる。

幼児一人一人の内面理解を通して、集団の中で幼児一人一人が主体的に生活できる支援を考察してみる。

幼稚園の地域的環境を考慮し、自園の特色と幼児の生活が相互作用して成長と学びに結びつく行事のあり方について考察する。

自己評価にもとづく保育課題について、園内における職員間での取りあげ方と改善に向けた実践例を持ち寄って考察してみる。

多様化する保育ニーズに対する、自園の方針と教育的観点からの捉え方と対応について考察する。

職員会議のあり方、職員間の話し合いの機会の設け方などから、職員の意見が出やすい雰囲気作りの工夫を持ち寄って考察する。

地域における研修会等で、各人が課題を持ち寄って自身の保育を振り返り、素直に自己開示できる話し合う場の持ち方などを考察する。

指導要録記入の留意点と扱い方に関して、記録の取り方の工夫と簡潔で適正な表現での記入方法などを考察する。

子どもの発達と幼稚園教育の課題 (研修俯瞰図 C 分野)

(分科会等テーマ群)

- 3・4・5歳児の生活と5歳児の育ち
- 協同的なあそびと学び
- 子どもの発達とさまざまな保育の実践
- 心の育ちと保育
- 学びの連続性を考える保育
- 社会性の育ちと幼児の規範意識の芽生え
- 発達理論と現代の子ども
- 各地区独自の課題

主題設定の理由

子どもの発達は、各年齢に即した段階があり、身体面、精神面、能力面などさまざまな面から発達が見受けられるものである。

幼児期に関わる保育者は、その時期だけをとらえるのではなく、幼児期の前の段階である乳児期も含めて、また、幼児期後の児童期のことも踏まえて発達段階を理解する必要がある。

特に、幼児期では、人の成長にとって必要な部分となる重要な事項が含まれている。それは、周囲の環境による関わりや自発的、能動的な働きかけによるものなど、保育者は、幼児期の特性を理解し、踏まえて対応する必要がある。

では、幼児期の特性とはどのようなものか。幼児期の特性には、おおむね二つの分野に分けられる。一つ目は、幼児期の生活。二つ目は、幼児期の発達に分けられる。

一つ目の幼児期の生活とは、子どもたちの生活の場、他者との関係、興味や関心がある。

生活の場においては、幼稚園が子どもたちにとって初めての学校であり、初めての集団生活の場になる。そのような環境下で、家庭とは違う集団生活でのルールなど協調性を学ぶ場となる。

他者との関係では、集団の場で相手を思いやる気持ちや個人の意思だけを通すことができないことを学ぶ。

興味や関心事では、集団の場は人間関係が広がり他者の行っていることに興味を示し、そこから好奇心や探究心が芽生えてくる。家庭では経験することができないことを幼稚園の場で学び成長することができる。

二つ目の幼児期の発達とは、まず人としての発達をとらえる。人は生まれて自然に発達できるものや周囲の環境による影響などで発達できるものがある。その中でも、幼児期の発達度合いは、著しく発達が見受けるものであって、身体的なことに限らず精神的にも人としても発達するものである。

発達を促すものとしては、幼児期の子どもたちは自ら興味や関心を持つようになり、積極的に関わりを持つことで発達する。また、周りの環境からの刺激によるものもあり、友だちと関わることで言葉を交わし、言葉を獲得する機会となることが刺激とな

る。

これらを踏まえると、幼児期の子どもたちは、日々の生活の中で人や物などあらゆる関わりを持つことで経験、体験をとおして人としての成長がある。

私たち保育者が幼児期の子どもたちと関係をもつことは、ただ毎日を過ごすだけでなく、人を育てる大きな役割を果たしていることを念頭におき、今後の幼稚園教育の課題として、保育者一人一人が能力を高め自己研鑽の意味でも目的意識を持って各研修会に参加し、子どもたちにとって幼児期が貴重な時期であることを知る必要性がある。これらを参考にしながら、さらに自分の地区や自園にとっての課題は何かなどを考え、今日の課題の研究テーマを設定することが必要である。

【研究の手がかり】

五領域の視点からみた発達、とりわけ社会性・道徳性などと関連させて、子どもたちの育ちを考える。

発達の連續性を考慮した上で、保育の在り方、子どもの生活や育ちについて考える。特に「心の育ち」については、年齢的な育ち、知性としての育ちの側面からも考えてみる。

社会の変化・地域の変化・家庭の変化という、子どもたちの取り巻く環境変化の中での、子どもの育ちや保育の関係を考える。

子どもたちの顔、体格、性格が一人一人違うように、保育をする保育者も一人一人が違っている。その違いを包含する保育の形態や在り方について考える。

協同的なあそびと学びを豊かにしていくためには、どのような生活やあそびの経験や学びが必要になるか考える。

『幼児理解と育ちの記録・あそびの考察』

(研修俯瞰図 D分野 1)

(分科会等テーマ群)

保育の記録を活かしながら、幼児一人一人の成長を支える

幼児理解と保育の記録の取り方

保育の記録と保育評価の課題

個人の記録と集団の記録の在り方

あそびと学び

保育の記録を通してあそびを考える

園内研修に生かす保育の記録

各地区独自の課題

主題設定の理由

【幼児理解の重要性】

はじめに子どもありき。

幼児を理解することがすべての保育の出発点であり、保育のプロフェッショナルとは“子どもをどう理解するか”を探求し続ける保育者の姿にあるといつても過言ではない。

では、なぜ、幼児理解が重要なのか？

保育の現場で、保育者の会話に、「今年の子どもたちには昨年のやり方が通用しないわ」という話をよく聞く。これはなぜか？

それは、幼児一人一人がみんな違う個性を持った存在であること、また幼児期ならではの特徴的な発達の仕方があり日々成長発達を続け変化が大きいこと、さらに、クラスなど集団の中では、様々な個性が互いに織りなし多層的な育ち合いが見られること、などが昨年との子どもの姿の違いなのであろう。

このように、幼児は、個性や発達のスピードや段階が一人一人異なり、未来に向かって変化成長し続ける存在だといえる。

幼児が発達に必要な経験を得るために環境の構成や保育者のかかわり方も、幼児を理解することによってはじめて適切なものとなる。すなわち、個や集団としての幼児を理解することが保育の出発点となり、そこから、一人一人の幼児の発達を着実に促す保育が生まれてくる。

【あそびの姿から幼児理解を深めるために】

幼児の生きる上での核となるものは、幼児が全身全霊、全能力を一心にしておこなう“あそび”である。そこで、幼児理解を深めるためには、幼児のあそびの姿から、発見の驚きや不思議がったりなど、どのように感じているのか、何に興味をもっているのか、何を実現しようとしているのか、など幼児の気持ちになり、幼児の内面を読み取り、理解することが重要である。その際、幼児を見る視点として、身体面・社会面・情緒面・言語面・知的面、などから特性を読み取り、発達の変化を捉えていく必要がある。

また、集団の中で、子どもたちの中に何が育ち、どのような経験や学びが行われながら互いの関係性を深めながら育ち合っているのかなどを、あそびの姿から理解する必要がある。

【幼児理解を保育に生かすための記録】

幼児を理解する手がかりの一つとして、記録が必要になる。はじめから幼児の姿を的確にとらえて記録できるわけではない。自分なりに工夫し、記録を積み重ねていく姿勢が大切である。その積み重ねが幼児理解や評価をより適切なものにしていくことになる。記録にも様々な方法があり、文字としての記録だけではなく、写真や動画など映像に残す方法もある。その際に大切なことは、記録を元に保育者間で話し合い、共有して、様々な意見を聞きながら、多面的な見方をしていくことが重要である。

自分一人ではなかなか見えてこなかった幼児の姿も、周りの保育者のいろいろな意見を聞くことにより、幼児の姿を多面的にとらえることができる。自分の保育の質を高めていくには、他の保育者の意見を素直に受け止めて、自分の見方や保育を柔軟に変えていこうとする姿勢をもち続けることが大切である。

教育には謙虚さが必要であり、何よりも自分の視点の固定化や偏りを認識し、省みることが重要である。それには記録が重要な足がかりになるであろう。

以上のように、保育者は、幼児の行動の意味を理解し、発達を捉えることで、保育の見通しが持て、幼児の発達を支える保育が行えるようになるのである。

【研究の手がかり】

幼児理解を深めるためにはどんな視点が必要かについて話し合う。
幼児にとってのあそびの意味を捉え、特性を浮かび上がらせ、発達の変化を理解する。
保育を振り返り、より良い幼児理解のための保育の記録の在り方を考え、実践する。
子どもの姿を記録する中で、各年齢の育ちの特徴を捉える。
保育の記録をもとに、保育者間で事例研究等を行い、幼児理解を深める。

一人一人の子どもを受けてとめる特別支援教育 (研修俯瞰図 D分野 - 2)

(分科会テーマ群)

幼児理解と特別支援教育

気になる子や障がいを持つ子の保育

障がいを持つ子どもと保育者や子どもたちのかかわり

特別支援における保護者とのかかわりと連携

特別支援における関係機関との連携と個別の指導計画・支援計画

各地区独自の課題

主題設定の理由

平成 19 年度に改正された学校教育法第 81 条で、幼稚園においても小、中学校など他の校種と同じく、教育上特別の支援を必要とする幼児に対し、文部科学大臣の定めるところにより、障害による学習上又は生活上の困難を克服するための教育を行うことが明記された。

従前から幼稚園においては、一人一人の育ちに寄り添い、その実態を的確に理解した上で、環境を通してなされる教育や集団でのかかわり合いなど、幼稚園での生活全体の営みにより幼児の発達支援をおこなっている。その様な中で年々、集団での保育が進展する過程において、保育者や他の幼児から、いわゆる「気になる子ども」としてみられる幼児の実態に焦点があてられる機会が多くなってきている。

入園当初より保護者から医療または療育的支援を受けていることを伝えられ家庭と幼稚園の連携が円滑に行われている場合はもとより、入園後の実態から幼稚園生活において特別な配慮や支援を要する場合においては、幼稚園として個別の幼児に対する配慮や支援と他の幼児を含めたかかわり合いについて実態のアセスメントを行い保育者の共通理解を図ることが必要となろう。さらに、よりよい保育を実現するために、一人一人に応じた個別の指導計画の立案や具体的な対応について、職員会議や園内研修での協議を経て園としての方針を明確にし園全体で取組むことで、特別な支援と全体の保育が分断されることなく、保育が営まれることが重要であろう。

幼稚園での特別支援教育を充実するために保育者に求められるものは、家庭や関係機関との連携を十分にとることや、障がいに関する理解や知見を深めること、さらに具体的な対応スキルを高めることなどである。これらのこととを様々な研究と研修を通して高めることが、国連で採決され国も目標としているインクルーシブエデュケーションシステムの実現に少しでも近づくものとして期待したい。

【研究のてがかり】

家庭との連携について、共育と家族（家庭）支援など多角的な視点から考える。

障がいに関する基礎的な知識を習得した上で、特別な支援を要する幼児の理解について研究する。

保育実践において必要となるスキルについて研修する。

各幼稚園において作成される個別の指導計画について、各保育者が様式等を持ち寄

り実際の立案や記述の仕方について学び合う。

教育委員会および特別支援学校や小学校等の教員と合同の研究会を設け、地域の関係機関が連携して作成する個別の（教育）支援計画について検討する。

インクルーシブ教育を実現するために、保育者を含めた多様な子ども同士のかかわり合いについて理解を深め、より充実するための方策を考える。

保育の計画と実践と評価 (研修俯瞰図 E 分野)

(分科会等テーマ群)

- 幼児の望ましいあそびと生活を考える
- 幼児の姿や保育の記録にもとづいた計画と評価
- 幼児の育ちと教育課程の編成・指導計画づくり
- 園行事の取り組みと幼児・保育者の育ち
- 保育の実践を領域の視点でとらえる
- 幼児期にふさわしい体験や活動を考える
- 幼児の育ちを支える環境の構成
- 生き生きとした保育を行うための保育技術と教材
- 自己点検・自己評価の取り組みと課題
- 自己点検・自己評価の取り組みと学校関係者評価
- 同僚性にもとづく保育のふり返りと保育者の育ち
- 保育のふり返りを生かす計画・実践・研修
- 各地区独自の課題

主題設定の理由

保育の実践は、保育の計画と評価の在り方に支えられている。保育の実践の質は、計画と評価の質に比例して高まっていく。私たちの保育の計画や評価が、いつも、型どおりのものであったり、子どもたちの実態にまったく合っていなかったり、幼児期の発達にふさわしい計画や評価になっていないと、子どもたちの園での姿は、決して生き生きと豊かなものにはならないはずである。

保育の計画と実践と評価は、別々に考えるのではなく、総合的に、一体的に、とらえる保育の組み立て方が求められる。つまり、計画と評価が保育の始めと後にあるのではなく、それは、今、そこにいる子どもたちの理解を深め実態把握を確かにおこなっていく方法であり、保育の実践を、ていねいにとらえていくプロセスと考えることが必要である。

従って、計画が先行するものではなく、その場その場の子どもたちの状況によって柔軟に変えていける計画性も大切な要點であるし、保育の評価は、子どもたちの姿によって具体的に示され、且つ、実践に沿って分かりやすく説明されなければならない。常に保育の実践そのものを一番大切にし、子どもの姿を基に語ることのできる保育であることを失ってはならない。

一方、保育者の「専門性」の在り方を考えていくことも重要である。保育の計画と実践と評価を高めていくためには、それを確かに受けとめ、進めていけるための「専門性」が欠かせない。その専門性の具体的な内容としては、「保育記録の取り方」「環境の構成力」「保育技術・教材理解」などがあげられるが、さらに「保育者集団としての同僚性を生かした園内研修や保育のふり返り」ができることも重要な「専門性」と言えよう。

【研究のてがかり】

教育課程や指導計画をどのように作成しているのかを、互いに具体的な編成の事例を出し合いながら協議する。協議の中で、自分の園の教育課程や指導計画の編成の在り方と何が違うのか、何が共通なのかを整理し、課題を明確にして、課題解決のための協議や研究をおこなう。

保育記録を持ち寄り、それぞれの記録の在り方の良点や課題について協議する。また、ビデオや写真などの視覚的な媒体を使って記録した保育を、「あそびの在り方」「保育者のかかわり」「環境の構成」等々、いくつかの協議の項目を選び、それについて、まず、保育者間で自分の考えや感想を出し合い、新たに気づいたこと、疑問に感じたこと、学んだことを発表する。

保育の質を高める「園内研修」の内容と課題について協議する。また、その実現や解決していくための方法を研究する。

自らの保育の実践を、より自覚的にふり返り、適切に自己評価できるやり方とはどのようなものがあるのかを、自己点検・自己評価の実際を提示し合い協議する。

また、誰がみても納得できる自己点検・自己評価の在り方とはどのような条件が必要なのかを研究協議する。

言葉あそび、表現あそび、造形あそび、わらべうたあそび、運動あそびなどの実際を紹介し合うことを通して研究する。また、それらの技術を深める研修の場を設けることで、保育現場で役立つ「保育技術」のスキルアップをおこなう。

「保育教材」の在り方、内容を保育の実践を元にして研究する。たとえば、幼児の感性を豊かにする、考える力や学ぶ姿が育つ、表現の楽しさを生みだす等々のテーマを挙げて、それに沿った「保育教材」の具体的な事例を出し合ったり、季節ごとの保育の場に生かす「保育教材」の事例検討をする。

地域・家庭支援・保護者とのかかわり (研修俯瞰図 F 分野)

(分科会等テーマ群)

- 共感し合える保育者と保護者との関係づくり
- 幼小の連携と幼稚園教育の在り方
- 家庭支援の在り方・保護者との連携の在り方
- 地域とのかかわりを保育に生かす
- 幼稚園における地域の子育ての支援の在り方
- 災害と子ども
- 各地区独自の課題

主題設定の理由

幼児の生活は、家庭、地域社会、幼稚園と連続的に営まれている。幼児の家庭や地域社会での生活経験が、幼稚園という場を通して保育者や他の幼児とのかかわりを深めることで豊かになり、それがさらに生活に広がりを与えるという循環により、幼児の望ましい発達が図られていく。

しかし、地域社会や家庭の姿の変貌は、幼児の育ちにさまざまな影響を及ぼしている。たとえば、産業構造の変化により子どもが目にすることでお働く人が減り、幼児がモデルとする大人の姿が地域社会から失われつつある。また、家庭においても、核家族化が進むなどにより、本来家庭の中で家族が営んでいた家事労働を中心とした家庭の機能が外在化され、幼児は家庭の中で学ぶべき創造する力、工夫する力、我慢する力、協力する力などを育てることが難しくなりつつある。

こうした背景を考えた時、幼稚園は地域の実態や保護者および地域の人々の要請などを踏まえ、地域における「幼児期の教育センター」としての役割を担い、積極的に幼児の育ちに対する支援をしていく必要がある。たとえば、子育て相談を園児の保護者のみならず、地域に住む乳幼児を育てている保護者にも門戸を開くこと、子育てについての情報を発信すること、保護者同士や地域住民同士の交流の機会を設定することなど、さまざまな活動を通して幼児の健やかな成長を支えていくことが大切である。

さらに、「子どもの発達」を長期的視点でとらえ、幼児期から児童期への発達と学びの連続性を理解し、幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続のために、小学校との情報交換を積極的に行い、保育者と小学校の教師が教育内容について相互に理解することにより、幼・小が各自の立場で、子どもの育ち、学びのより良い方向、あり様を見直し、意欲の形成や、どのように子どもの生きる力を育むかを考えていくことも重要である。

以上のように、幼稚園がなすべきことは、保育をすることはもちろんであるが、地域支援・家庭支援のための活動をコーディネートすることも大切な仕事となってきた。これは、園の設置者や園長のみならず、保育者すべてが地域支援・家庭支援の意識を持つことも大切なことと考えられる。

保護者への対応の仕方も日々の活動において重視されなければならない。情報の過多、価値観の多様性、少子化の時代の傾向は、家庭における子育ての不安、過度の心

配も生んでいる。保護者は保育者の幼児へのかかわりの仕方を間近に見ることにより、幼児へのかかわり方を学ぶことが多い。また、保育者が気付くその幼児の良さや成長の姿を伝えることで、子育てへの勇気を与えることもできる。幼稚園と保護者とのこうしたかかわりを通して、幼児の姿への保護者の理解は深められる。

幼稚園は、さまざまな機会にさまざまな手立てをもって、地域や家庭との連携を深め、保護者とのかかわりを深め、幼児の健やかな育ちの支援に配慮することが大切である。

【研究の手がかり】

幼児が地域や地域の人々からどのようなことを学ぶことができるか考え、その活用する方法について検討する。

幼稚園の実態を地域に情報発信すること、および幼稚園の教育資源を地域に生かすことにより、地域との交流を図るにはどのような手立てがあるか考える。

家庭と幼稚園のつながりをよくし、共感しあえる保育者と保護者との関係づくりをするためには、どのような方法があるか考える。

子どもは幼児教育を経て児童期へと育っていく。保育者と小学校の教師がともに幼児期から児童期への発達の流れを理解するためにはどのような取り組みが必要か考える。

保育者と小学校の教師がそれぞれの校種において特有に用いられる用語を理解するとともに、相互の教育観や子ども観を理解するにはどのような取り組みが必要か考える。

特別分野

(分科会等テーマ群)

- 2歳児の発達と満3歳児保育の在り方
- 幼稚園教育と預かり保育の実際
- 幼稚園における学校評価について
- 幼保一体化について
- 公開保育について

主題設定の理由

時代の変化とともに、様々な今日的課題が増えています。
これらの課題に対してどのように向き合い解決していくか、事例を持ち寄り、今後の幼稚園の進むべき道を研究したい。

【研究の手がかり】

2歳児の発達に考慮した満3歳児の教育は、どのようにあるべきかを事例をもとに研究する。

教育課程に係る教育時間の終了後等の預かり保育の実施に当たって、幼稚園教育要領に示す留意事項を踏まえ、さらに具体的にどのような工夫や配慮が必要かを研究する。

学校評価の趣旨を踏まえ、幼稚園の実情に即した評価項目や指標の立て方、評価の実施やその結果の公表の方法等について、どのような工夫や配慮が必要かを研究する。

国の示す幼保一体化について、幼児の成長や発達が損なわれないように実現するにはどのような方策をとるべきかを研究する。

保育者自らの保育の質を高めることに留まらず、広く地域社会に対して保育の実際を具体的に開示し、幼児教育の意味や価値を伝えていくことを踏まえた公開保育の在り方を研究する。

重点課題研修・養成講座

重点課題・講座

保育現場におけるファシリテーター（facilitator）を育てる園長・副園長・主任・中堅の保育者を対象にした養成講座

「園内研修」を高めていくための園長・副園長・主任・中堅等を対象にした特別研修

重点課題研修・養成講座 開設の理由

園内研修の実施は、保育者の資質の向上・維持のためには欠かせないものです。その効果的な実施のためには、研修を取り仕切る園長・主任などが「ファシリテーター」として適切にリーダーシップを発揮することが必要です。

そこで今回の重点課題研修として、園内研修の資質向上に向けた園長・副園長・主任・中堅向けの特別研修および、保育現場におけるファシリテーターの養成を取り上げることとしました。

保育者は高い専門性が求められるプロフェッショナルであり、免許取得の課程における知識・技能の習得に留まらず、常に自らが置かれた保育環境において、自らをふり返り、高めていくことが求められています。そのためには、もちろん集合研修による新しい知識や保育手法を学ぶことも必要ですが、自らが置かれた保育環境における課題や問題意識に沿った学びの場も求められます。園内研修は、各園が抱える個別的な課題・問題に取り組むことが可能な上、それぞれの保育者の抱える事例やバックグラウンドを理解し合った同僚と学び合うことなどのメリットを有しています。

しかし、多くの園の主任や中堅の保育者が、後輩保育者の価値観の違いなどに困惑したり、指導に苦慮している実態があります。先輩・ベテラン保育者による「マイナス面の指摘・注意」に終始することで若い保育者が極端に自己評価の低いふり返りの連続といった状態も少なくありません。

園内で目指す保育を共有し、改善点を冷静に見つけて解決していくといった前向きな園内研修が行えるようにする必要があります。そのためには、先輩保育者が新しい考え方に対応し、若い保育者の感性を生かした保育を尊重し、経験の少ない保育者が保育者として、人間として成長することをサポートし、園内のコミュニケーションを円滑にしていくことが大切です。そのような同僚性は園内の教育効果を高め、研修や指導から得たものが若手保育者の実践に繋がり、ひいては広く社会に対して幼児教育の意義と重要性をアピールする素地作りにも繋がると言えるでしょう。

本重点課題では、園長・主任・中堅保育者が指導的な役割を果たすために必要な知識・知見を身につけ、効果的なファシリテーションの事例を学び、ファシリテーター同士の課題や目標を共有して学びえるような研修会をプロデュースすることを目指し、有識者の意見や他分野の知見等を参考にしながら取り組みたいと考えます。

* ファシリテーターとは

ファシリテートという動詞は「容易にする・円滑にする・促進する」といった意味を持ちます。特に会議や研修の場におけるファシリテーターは、「プロセスに働きかける」ことによって、会議や研修の目的が達成されるように導く役割を担います。このプロセスには二つの側面があり、一つは「外面のプロセス」すなわち会議・研修の進行や段取りであり、もう一つは「内面のプロセス」すなわち思考の枠組みや学習の流れ、感情の動きや人間関係になります。ファシリテーターは、

この両面のプロセスに働きかけことで、響きあい学びあう場をプロデュースします。

* 幼稚園におけるファシリテーターの役割

個々の保育者や園の抱える個別的な課題をテーマとして共有し、「肯定的な部分、出来ていること、満足感、保育の喜び」などに着目しながら、「どうしたらもっと良い保育ができるか」という観点でふり返りを促し、共に課題をとらえ改善策を考えるような会議・カンファレンスを主導し、当事者の気づきはもちろん、それ以外の保育者の学び・気づきをも促し、園として・保育者集団としての目標を共有して、共に高め合うチームをつくる。